

[研究報告]

母性看護実習を充実させるための効果的な事前準備に関する検討 第一報

～実習終了後の四年生へのアンケートから～

緒方妙子、坂井邦子、江島峰子、原田美智

【要旨】 調査目的：母性看護実習の事前準備として行った直前演習や学習課題レポートの効果や活用実態を把握し、事前準備のあり方を検討する。方法：A大学第4学年次生121名を対象とし、実習終了後の振り返り調査を行った。質問紙は選択回答、および一部自由意見の記述方式。結果：第3学年次の実習直前演習への参加態度に関する自己評価では、97%の学生が良好としていた。演習技術項目のうち、臨地実習で87%～57%の経験率であった項目は、「新生児のバイタルサイン測定、沐浴、身体計測」、「妊婦褥婦の事例看護」、「妊婦の腹囲・子宮底測定、レオポルド触診・児心音聴取」であった。これらの項目は、学生が「後輩の演習でも続けたほうが良いと思う項目」とも一致していた。演習の中に取り入れた「Theme Reportの計画作成」に関しては、約7割の学生がテーマの方向性が見えてきているものの、この学習課題に積極的な意義を見出して実習で主体的に展開できた学生と、そうでない学生では、自由意見の内容が大きく違っていた。事前学習課題レポートでは、約9割が「実習で役立った、活用した」としているが、「自分の学習内容では浅かった」や、「一つ一つの設問間を関連づけて指示してほしい」という意見もあった。結論：演習技術項目では、臨地実習での経験率が多い項目を希望するという学生の意向が明確となった。「Theme Reportの計画作成」、「事前学習課題レポート」に関しては、学生個々の受け止め方の相違を踏まえた指導が必要である。

キーワード：母性看護実習、事前準備、実習直前演習、演習技術項目、学習課題レポート、Theme Reportの計画作成

【はじめに】

看護教育は、社会のニーズの変化を受けて、大学化の波が押し寄せ、看護教育の内容や方法など、その教育環境は大きく変わりつつある。しかしながら、看護が臨床という相互行為の場にふさわしい知、即ち「臨床の知」¹⁾の形成に焦点化して教育方法を選んできたこと、つまり、授業として「臨地実習」を行ってきたことは連綿と続いており、広く定着している。実習時間数の制限など、教育環境の変化の流れのなかで、臨地実習を教育の場として充実させるという志向はむしろ強まっており²⁾、我々も、講義や学内演習、臨地実習を通して「臨床の知」の獲得に向けて日々努力しているところである。

A看護大学における領域別実習は第3学年次に行われ、母性看護領域もその中で2週間(2単位)の実習体制で行っている。それまでに共通科目、専門科目の必修科目の講義はほとんど修了してい

る。母性看護学の講義は第2学年次前期に3単位60時間行っている。実習は、第1学年次に基礎看護実習3単位を修了しているが、第2学年次の1年間は実習がないため、第3学年次からの領域別実習に臨むにあたっては、事前に学内での周知な準備を必要としている。そのためA大学では、領域別実習に入る前の約10週間に、各領域が同時期に集中して演習やオリエンテーションを取り入れている。その中で母性看護領域も4日間の集中演習や事前学習課題レポートによる基礎知識の確認を行い、実習にスムーズに入れるよう、また実習中に準備不足で困らないようにと意図している。

しかしながら、実習先での実際の状況は、演習で看護技術として実施したことが学生に全く身に付いていなかったり、事前学習課題レポートで確認しているはずの基礎知識の内容が、質問されたときに答えられなかったりする学生もかなりい

る。

以上のことから、今回の調査目的は、実習の事前準備として行った直前演習や学習課題レポートの効果や活用実態を把握し、事前準備のあり方を検討することである。

【方法】

母性看護の実習直前演習の内容：

4 日間で行い、技術演習を 2 日間、(妊婦・褥婦のケア 1 日間、新生児ケア 1 日間)、Theme Report の計画作成演習を 2 日間行っている。

技術演習の主なもの、妊婦ケア技術 (①子宮底長・腹囲測定、②レオポルド触診法、③児心音聴取、④浮腫の診かた、⑤分娩監視装置の取り扱いと判読の仕方、⑥分娩予定日の算出方法)、褥婦ケア技術 (⑦産褥期のアセスメント項目⑧子宮復古状態の観察法、⑨外陰部ケア・悪露交換、⑩乳房の観察・自己管理法、授乳要領)、新生児ケア (⑪観察項目、⑫バイタルサイン測定法、⑬身体計測、⑭沐浴技術) である。

また、学習面の事前整理として「事前学習課題レポート (35 項目)」の実習前提出を義務付けている。

調査対象：A看護大学第 4 学年次生 121 名。

調査日時：平成 19 年 4 月 6 日

調査方法：事前準備が実習に生かされたかをみるため、実習終了後に振り返りの調査を行った。質問紙は選択回答、および一部自由意見の記述方式。

調査内容：1) 演習への参加態度や取り組みの積極性、2) 演習目的・内容の理解、3) 演習技術項目の実習での経験状況と、学生が思う今後も続けてしたほうがよい演習技術項目、4) 演習での Theme Report 計画作成の進み具合、及び自由意見、5) 事前学習課題レポートへの取り組み態勢や実習での活用状況、及び自由意見

分析方法：

調査内容の単純集計、及び各設問間の相関に関してはソフト SPSS13.0 を用いて、Spearman の順位相関分析で両側有意差検定を行った。

また、自由意見の記述分析では、類似したものをまとめて分類し、学生意見の多寡も含めて考察した。

倫理的配慮：対象者に対し、調査の前に主旨をよく説明すると共に、調査用紙にも調査目的や、無記名でプライバシーに配慮していること、成績や評価には全く関係しない調査であることなどを明記した。回収は回収箱にて行い、自由意志による個別投函をもって同意が得られたものとした。

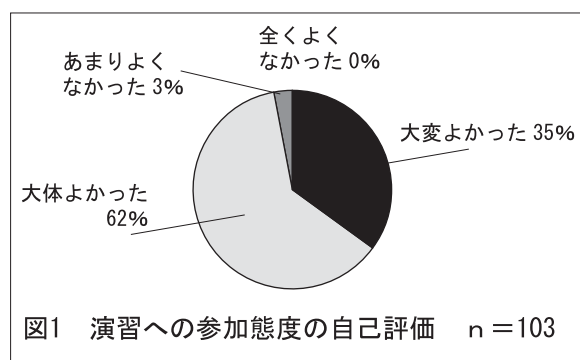
【結果】

本調査に同意してアンケートに回答した者は 103 名 (回答率 85.1%) で、有効回答数は 103 名、有効回答率は 85.1% であった。

1. 母性看護演習への参加態度

1) 演習への参加態度について (図 1)

[大変良かった] 36 名 (35%)、[大体良かった] 64 名 (62%)、[あまり良くなかった] 3 名 (3%) で、97% の者が [良かった] と答えている。



2) 演習への積極性

[大変積極的] 42 名 (41%)、[大体積極的] 58 名 (56%)、[あまり積極的でなかった] 3 名 (3%) で、97% の学生は [積極的] に取り組んでいた。

2. 演習目的・内容の理解

[よく理解できた] 20 名 (19%)、[大体理解できた] 80 名 (78%) で、97% の学生は [理解できた] と回答していた。

3. 演習技術項目の臨地実習における経験状況

1) 演習技術項目の臨地での経験項目

学生の過半数が経験した項目は、〈新生児のバイタルサイン測定〉87%、〈沐浴〉74%、〈妊婦褥婦の事例看護〉70%、〈腹囲・子宮底測定〉70%、〈新生児の身体計測〉59%、〈レオポルド触診・児心音聴取〉57% であった。

経験率が 50% 未満であった項目は、〈浮腫の診かた〉38%、〈予定日算出〉35%、〈授乳要領〉31%、

〈CTG〉20%、〈悪露交換〉12%であった。

2) 見学や説明での実習経験となった技術項目

見学や説明での経験となった項目は、〈分娩監視装置機器の取り扱い方〉64%、〈悪露交換〉63%、〈授乳要領〉54%、〈浮腫の診かた〉38%、〈新生児の身体計測〉34%、〈レオポルド触診・児心音聴取〉30%、〈予定日算出〉29%、〈腹囲・子宮底測定〉24%、〈沐浴〉24%、〈妊婦褥婦の事例看護〉11%、〈児のバイタルサイン測定〉11%であった。

3) 実習で経験できなかった技術項目

実習では見学も説明もなく、経験できなかったと学生に認識されている技術項目は、〈予定日算出〉30%、〈悪露交換〉25%、〈浮腫の診かた〉21%、〈分娩監視装置機器の取り扱い方〉15%、〈授乳要領〉12%、〈レオポルド触診・児心音聴取〉10%〈事例看護〉10%、〈児の身体計測〉4%であった。

4) 今後も続けた方がよいと思う演習項目 (図2)

学生が後輩にも続けた方がよいと思う項目は、〈児のバイタルサイン測定〉96%、〈沐浴〉94%、〈腹囲・子宮底測定〉92%、〈児の身体計測〉83%、〈レオポルド触診・児心音聴取〉81% 〈妊婦褥婦の事例看護〉67%、〈授乳要領〉59%、〈分娩監視装置機器の扱い方〉57%、〈予定日算出〉57%、〈悪露交換〉51%、〈浮腫の診かた〉49%であった。

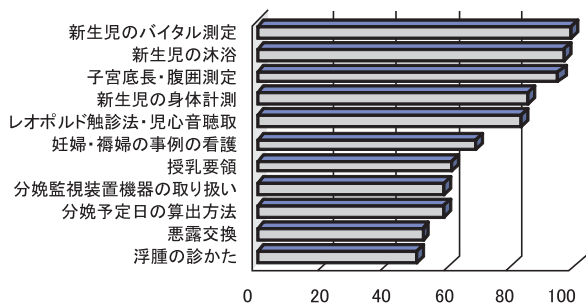


図2 今後後輩にも続けた方がよいと思う演習項目

4. 演習での Theme Report 計画作成について

1) 演習期間内に Theme Report のテーマが絞れたか (図3)、文献が探せたか。

テーマ絞りでは、[ある程度絞れた]が30名(29%)、[方向性が見えてきた]が41名(40%)、[まだ漠然としていた]が29名(28%)、[全く絞れなかった]が3名(3%)であった。

また文献は、[5編程度探せた]が17%、

[3, 4編探せた]が50%、[2, 1編探せた]が30%、[全く探せなかった]が3%であった。

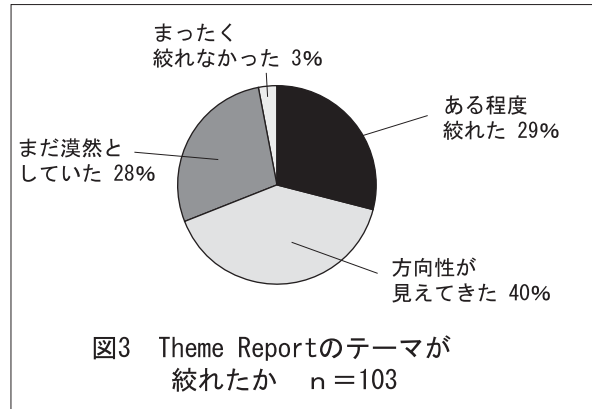


図3 Theme Reportのテーマが絞れたか n=103

2) Theme Report 作成に関する自由意見

自由意見として、(1)積極的な態度で臨めている意見、(2)積極的な態度で臨めなかった意見、(3)実習現場の条件が絡んで困難感を持った意見、(4)事前準備の工夫・改善を求める意見、に集約された。その内容は、

(1) 積極的な態度で臨めている意見：

①Theme Report は自分の興味関心のあること、深めたいこと、自分の将来と直結していることなどを行うことができたので楽しく、意欲向上につながった。(5名)

②難しかったけど、いろんな論文を通して、どのように書いたらよいか分かって、すごく役立ちました。(3名)

③これがあって実習の具体性が見えた。(1名)

(2) 積極的な態度で臨めなかった意見：

①病院実習でいっぱいだったので、Theme Report まで実習期間にすべてするのは時間がかかるし、混乱する。(4名)

②テーマを決めるのに時間がかかる。実習中にインタビューする時間がなかなか作れなかった。(4名)

③内容や文献の探し方等もう少し詳しい説明が欲しかった。(3名)

④私は母性実習が最後にあり、次にある実習のことで頭がいっぱいだったので、深く考えられず、ほとんどテーマが絞れなかった。(1名)

⑤自分が興味あることが少なく、実習開始まで具体性につかめなかった。(2名)

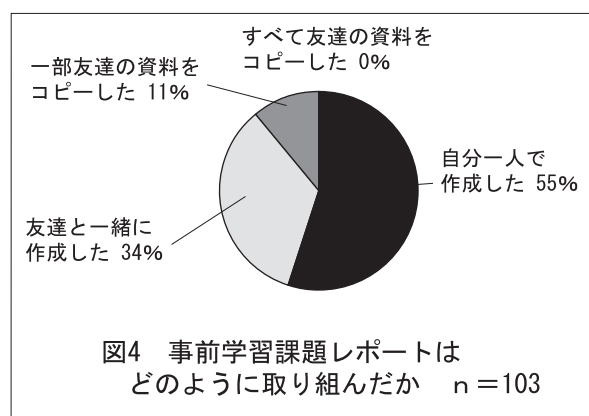
(3) 実習現場の条件が絡んで困難感を持った意見：

- ①病院の都合でテーマが変更になることがあり、自分のしたいテーマができなかった。(3名)
- ②病院側から対象者に制限が出されたので対象者が少なく、アンケート調査は難しかった。できれば多くの人から話を聞いてレポートを書きたかった。(2名)
- ③病院の状況(実習先)をもっと詳しく知っておきたかった。(1名)
- (4) 事前準備の工夫・改善を求める意見：
①実習が始まる直前にテーマ変更を言われ、すごく困った。変更しなければいけない時にはもっと早くから準備ができるようにしたいし、考える時間も欲しかった。(1名)

5. 事前学習課題レポートについて

1) 事前学習課題レポートはどのように取り組んだか。(図4)

[自分ひとりで作成した]が57名(55%)、[友達と一緒に作成した]が35名(34%)、[一部友達の資料をコピーにした]が11名(11%)、[すべて友達の資料をコピーにした]は0であった。



2) 事前学習課題レポートは実習で役立ったか。

[大いに役に立った]が43名(42%)、[少しは役に立った]が51名(49%)、[あまり役に立たなかった]は8名(8%)であった。[全く役に立たなかった]は1名(1%)であった。

3) 事前学習課題レポートは実習中に活用したか。

[大いに活用した。]が34名(33%)、[時々活用した。]が55名(53%)、[あまり活用しなかった。]は11名(11%)、[全く活用しなかった。]は2名(2%)であった。

4) 事前学習課題レポートは国家試験の受験勉強に向けて活用する予定があるか。

[活用する予定である。]28名(27%)、[少し活用する予定である。]50名(49%)、[ほとんど活用する予定はない。]19名(18%)、[全く活用する予定はない。]4名(4%)であった。

5) 事前学習課題レポートに関する自由意見

自由意見として、(1)積極的に活用できている意見、(2)積極的に活用できなかった意見、(3)事前準備の工夫・改善を求める意見、に集約された。

その内容は、

(1) 積極的に活用できている意見：

- ①実習を計画的に進められ、根拠を踏まえた学びができ、記録時にも役立った。(15名)
- ②実習中に生じた疑問についてすぐ調べることができ、学習が深まった。(14名)
- ③事前学習と、指導者からの質問、実習で経験した内容が一致していた。(12名)
- ④自信を持って実習に臨めた。(11名)
- ⑤自分なりにまとめているので資料として見やすく、空時間にも活用できた。(11名)
- ⑥実習中のケアをするときに役立った。(5名)
- ⑦男子学生・成人男性としてレポートすることで視野が広がった。(1名)

(2) 積極的に活用できなかった意見：

- ①自分の学習内容が浅かったり、役立つまとめ方ができていなかったため、実習では教科書の方を利用することが多かった。(12名)
- ②実習直前に十分復習できず、役立てることができなかった。(8名)
- ③受持ちが妊産婦でなく、実習地で実際に活用できないものもあった。(7名)
- ④一つ一つの設問をもっと関連付けて、もう少し細かく指示してほしい(2名)

(3) 事前準備の工夫・改善を求める意見：

- ①レポートを縮小コピーにしてポケットに入れて活用した。持ち歩ける小さなノートにまとめたほうが良い。(4名)
- ②手書きの方が皆一人で勉強すると思う。(2名)
- ③一度に35項目は大変なので、回数を分けて提出できるとよい(2名)

6. 相関分析の結果(表1)

調査項目間の相関分析の結果を表1に示す。

表1 相関分析の結果 (相関係数は1%水準で有意のもの)

演習への参加態度	演習への積極的取り組み (0.603)
目的・内容の理解	Theme Reportのテーマ絞 (0.301)
事前学習課題レポートを実習中に活用した	事前学習課題レポートが実習で役立った (0.579)
演習技術項目間の相関状況	
妊産褥婦の事例看護経験	授乳要領(0.331), 悪露交換経験(0.411), 児沐浴経験(0.380), 予定日算出経験(0.349) 分娩監視装置の扱い方(0.282)
新生児の沐浴経験	児身体計測(0.336), 悪露交換(0.274), 子宮底・腹囲測定(0.270), レオポルド触診/児心音聴取(0.291)
子宮底・腹囲測定経験	レオポルド触診/児心音聴取(0.350)

* () 内は相関係数

【考 察】

1. 母性看護演習への参加態度

学ぶ主体である学生がどのような準備状態（レディネス）にあるかは、学習の効果に大いに影響する。堀は、「教師が教科内容を伝えようとしても、学習者が自分の内にそれらを取り込もうとしなければ教育は成り立たない」³⁾とし、教授—学習過程は双方向の流れがあって初めて成り立つものであること、学習者の主体的な態度が重要であることを強調している。

母性看護演習への参加態度は、「大変良かった」〔大体よかった〕が97%を占め、学生自身の自己評価はかなり高い。また、演習には積極的に取り組んだかでは「大変積極的」41%、「大体積極的」56%であり、97%の学生は積極的に取り組んでいる。また、この「演習への参加態度」と、「演習への積極的な取り組み」には、かなりの相関が見られている。

この時期の学生は、専門科目のほとんどを第2学年次までに履修しており、実習内容の学習面でのレディネスは整っている段階であったと推察する。また第3学年の新学期ということもあり、学

生の全体的なモチベーションは高く、それは客観的にも出席率の良さや遅刻の少なさ等にも十分現れていたため、それらが演習への積極的な参加態度となって表れていたと考える。

しかし、3%の学生が参加態度や積極性の面で、「あまりよくなかった」としている。そのような学生には、心身の健康状態の把握と共に、積極的になれなかった理由を明らかにして、学生の個性を尊重したきめこまやかな支援が必要と思われた。

演習に臨む前の学生自身のレディネスを高めておくことは、とても重要であると考えられる。

2. 演習目的・内容の理解

演習時間が限られているので、事前に演習要項冊子にて、演習目的・内容・時間配分等を記述したものを配布しているが、当日の朝も再度簡単なオリエンテーションを行い、目的意識の確認を行っている。その目的意識の理解の程度を質問した。「よく理解できた」ものは2割程度であるが、他の大多数は「大体理解できた」と回答し、97%の者は「理解できた」としている。母性看護の技術演習は、講義時間内では時間的制約があり、この実習直前演習で初めて行う技術項目も多い。そのため、演習要項冊子を読んでも、また当日、目的・内容の説明を受けても、具体的なイメージが明確に抱けなかった学生も多かったのではないかと推察され、このことが理解度と関連しているのではないかと思われた。

3. 演習技術項目の臨地実習における経験状況

学生の過半数が経験した項目は、〈新生児のバイタルサイン測定〉、〈沐浴〉、〈妊婦褥婦の事例看護〉、〈腹囲・子宮底測定〉、〈新生児の身体計測〉、〈レオポルド触診・児心音聴取〉であり、これらは演習でも学生個々が実施できるよう重点を置いている技術項目であった。ただ、〈妊婦褥婦の事例看護〉においては、時間の制限もあり、グループ内での質問による確認を行っているのみであった。そのため、今後はこの事例看護の側面での学生個々の理解を促進できるような方策が必要と考えられる。

また、経験率が50%未満の項目は、〈浮腫の診かた〉、〈予定日算出〉、〈授乳要領〉、〈分娩監視装

置機器の取り扱い方)、〈悪露交換〉であったが、これらは、演習ではデモンストレーションを行って「何のために、なぜそうするのか(行為の意味づけ)」⁴⁾の説明を加え、学生の理解が深まるようにしている技術である。

学生が後輩にも続けた方が良くと思う演習項目に、実習での経験率が多いものは全て入っていたが、経験率の少ない、このデモンストレーションで取り上げているものもあげられていた。実習現場では経験ができていく技術であるからこそ、演習での体験が貴重とも言えるので、これらの状況を学生にも良く説明し、技術演習の機会を充実させることが必要と考える。

相関分析で、「妊産褥婦の事例看護経験」と「新生児の沐浴経験」は、多くの演習技術項目との相関が見られているので、実習場の条件が許す限り、多くの学生に経験の機会を与えて学習効果を高めて行くことが求められる。

4. Theme Report の計画作成演習について

クリティカルシンキング(批判的思考)について、最近日本でも取り上げられるようになり、看護教育の分野でもクリティカルシンキングの翻訳本^{5) 6)}の出版が目立つようになってきている。批判的に思考するスキルをいかに育成するか、学部教育および大学院教育の中で重視されている。

Mary A. Miller は、批判的思考を、「何を信じてどう行為するか決定するとき、その焦点、言語、準拠、前提、証拠、推論、結論、適用、文脈のすべてを考慮に入れる目的思考型の思考である」⁷⁾と定義している。

人々の「生活の質」を高める看護専門職としての働きができるようになるためには、できるだけ良く考え、思考能力を生涯にわたって拡大し続けていく義務があると考えられる。

A大学では、母性の臨地実習施設として、病院、産院、医院、助産所等、多様な医療施設で行っている。それは母性看護の活動分野の幅広さを示すことにはなっているが、学生個々にしてみればその中の1～2箇所の施設でのみ実習を行うので、どの施設で実習を行うかによって、実習内容や経験の幅に差が出てくるというのが実情である。

そこで、母性看護学の統合を図り、看護者とし

ての思考能力を上げ、問題提起や研究を行う素地を養う目的で、どの施設の実習でもまとめられるように、自己の興味・関心に基づいた「Theme Report」を実習記録として課している。

Theme Report 課題の意図は、問題解決する際の批判的思考の体験をしてみることであり、1つのテーマを深く追究し、それがどんな意味を持つかをじっくり考えて、解決の糸口を探ることもある。1つのテーマから、母子関係、夫婦関係、家族、性問題、女性を取り巻く環境へと視点を広げて行き、女性・子ども・家族の幸福のために今何が求められているかを、社会的な背景を踏まえて、深く考えを掘り下げていけることを目指している。特に教員やスタッフとのディスカッションを通して得られる学生の気づきには、看護能力を大いに推進させるヒントとなるものがあるであろう。考え付いたその解決方法は本当に根拠のあるものか、それらを吟味することは簡単ではない。しかし、そのプロセスの中で学生の自由な発想が引き出され、思考が耕され広がっていく。そのプロセスはまさに「臨床の知」の育成でもある。そのため、結果を重視するのではなく、論理的思考の過程、プロセスを大事にすることとしている。

ただ、提出される Theme Report は小論文形式としており、事前の文献学習、テーマ設定、臨床での対象設定や調査方法の計画等、総合的な能力を発揮しなければならない。実習までにその準備が十分でないことも過去に多々見られていたため、事前準備として、テーマ絞りや、文献探し等を演習期間内にも行うことにした。Theme Report の計画作成は演習期間内だけで進められるものではないが、目的意識ができて、これを機会に取り掛かれるようにと意図している。

テーマ絞りでは約7割の学生はその方向性を見出せていたが、残りの3割の学生は暗中模索のところがあったようである。学生の大半は演習期間内の時間を有効に使うことができていると思われるが、限られた時間内では、納得のいくテーマが必ずしも絞りきれないことも当然かと推察される。また、文献探しにおいては約7割が3編以上を探ることができていた。文献はテーマによっては図書館に十分内蔵されていないものもあったと

思われるが、文献検索の方法がわからずに、見出せていない者もいた（自由記述から）と推察された。

Theme Report 作成に関する「自由意見」では、[積極的な態度で臨んでいる意見] として、「自分の興味・関心のあること、深めたいこと、自分の将来と直結していることなどを行うことができたので楽しく、意欲向上につながった」とあり、この学習課題に意義を見出した学生からは、母性看護分野への幅広い関心の芽生えや、意欲的な取り組みなどにも繋がっていることが示唆された。

[積極的に臨めなかった意見] の中に、「病院実習でいっぱいだったのだから、Theme Report まで実習期間にすべてするのは時間がかかるし、混乱する。」や実習現場の条件が絡んだ理由として、「病院の都合でテーマが変更になることがあり、自分のしたいテーマができなかった。」などがあり、実習中、Theme Report を進めていくにあたって、困難性を感じた学生もいたことが窺える。

臨地施設の事情による変更は、学生にすれば事前準備が生かされず大変だったと受け止められたであろうが、現実の臨地では予定通りには進まないことはむしろ自然であり、こういう経験こそが、臨地の特性や実態をよく知ることに繋がる体験と言えよう。

中村⁸⁾は、「臨床の知」を「新しい未知の出来事に会ったときにも、よく知っていることが生かされて、事態の変化に対応することができる」さまを述べている。こういう経験をしたときの意味づけを教師がもっと強化しなければならないと考える。

「内容や文献の探し方等もう少し詳しい説明が欲しかった。」という意見もあり、Theme Report の演習に関しては、演習開始時の詳しい説明、文献の探し方などの詳細なオリエンテーションが必要だったことが窺えた。

相関分析で、演習の「目的・内容の理解」と「Theme Report のテーマ絞り」に相関が見られていたが、共通項は、演習や実習課題に対する「意義の理解」ではないかと察せられる。意義の理解が演習目的の理解やテーマの明確化につながり、課題の進行

具合にも大きく反映されていくものと思われる。実習を効果的に行うために、「意義の理解」は重要な鍵となるものと考えられる。

5. 事前学習課題レポートについて

母性看護実習に臨むにあたって、基礎知識の確認のために、35 項目の課題を「事前学習課題レポート」として提出することを課している。個人作成を基本としているが、そのレポート作成にあたっての取り組み方を質問した。

どのように取り組んだか、では、[自分ひとりで作成した] は 55% であり、残りの約半分は友達と共にいき、友達の頼りにしていることがわかった。[すべて友達の資料をコピーにした] は 0% であったが、[一部友達の資料をコピーにした] は 1 割の学生に見られていた。

「実習で役に立ったか」では、[大いに] 42%、[少しは] 49% で、91% の学生は「役に立った」と感じていた。また、「実習中に活用したか」では、[大いに] 33%、[時々] 53% で、「活用した」のは 86% であった。

また、「国家試験の受験勉強に向けて活用する予定があるか」では、76% が活用予定としている。

事前学習課題レポートは、母性看護の臨床的な基本知識の整理ができるようにしてあるので、実習中も積極的に活用して確実な知識を身につけてほしいし、また、自分でわかりやすく作成していれば、国家試験対策にも役立つと思われるので、活用してほしいと意図している。

学生に「大いに」活用され、役立つ事前学習課題にはもっと工夫の余地があることが察せられた。

事前学習課題レポートに関する自由意見では、[積極的に活用できている意見] として、「実習を計画的に進められ、根拠を踏まえた学びができ、記録時にも役立った」、「実習中に生じた疑問についてすぐ調べることができて学習が深まった」、「自信を持って実習に臨めた」、「自分なりにまとめているので資料として見やすく、空時間にも活用できた」があり、この学習課題に意義を見出せている。

また、[積極的に活用できなかった意見] として「自分の学習内容が浅くて役立つまとめ方がで

きていないため、実習では教科書の方を利用することが多かった」、「実習直前に十分復習できず、役立てることができなかった」などがあり、これらの意見を述べている学生 20 名の個々の背景をみると、事前学習課題レポートを〔友人と共に作成〕している者が 11 名で、そのうち〔一部友達の資料をコピーしたもの〕は 2 名であった。自分なりにまとめたものでなく、また内容が不十分である時には活用されることが少ないのではないかと察せられた。

また、「受持ちが妊産婦でなく、実習地で実際に活用できないものもあった。」という意見もあり、実習で直接活用できる場面がないと、事前準備の意義が薄れるという反応かと思われた。この点においても、先に述べたように、臨地では事前に準備したことが直接活用できない場合もありうること、事前に学習した意義は大きいことをもっと認識させる必要があると考える。

また、「一つ一つの設問をもっと関連付けて、もう少し細かく指示してほしい」、「一度に 35 項目は大変なので、回数を分けて提出できるとよい」、「手書きの方が皆一人で勉強すると思う」という学生の意見に関しては、次年度からはこれらの意見を反映した課題や提出方法等の改善を行いたい。

なお、本報告は、領域別臨地実習のすべてが終了した時点での一斉調査であり、母性実習を終えた時点からの期間は学生個々に違っているため、過去を振り返った意見の中でも、学生個々の記憶の鮮明さにおけるバイアスが含まれるものと考えられる。

【結 論】

演習技術項目では、臨地実習での経験率が多い項目を希望するという学生の意向が明確となった。「Theme Report の計画作成」、「事前学習課題レポート」に関しては、学生個々の受け止め方の相違を踏まえた指導が必要である。

【おわりに】

臨地実習という貴重な学習の場で、学生の学びを促進させるために、我々教師はどのような支援ができるか、実習開始前の準備で工夫できること

がもっとあるのではないかと考えて取り組んだ。

今回は、現在行っている学内準備に対して、学生の取り組み方や学生の立場からの率直な意見を幅広く知ることができた。学生からの前向きで建設的な意見に関しては、取り入れられるべきことは即取り入れて、次年度からの学習効果が少しでも上がるように努めたい。

看護の世界は日進月歩で日々変化している。看護師は常に新しい情報や研究結果を取り入れて、看護サービスの改善を目指していかなければならない。学習プロセスの獲得は生涯を通して生かされるので、教師は学習環境を整えて、臨床の知を得ていく学習プロセスそのものを、教育的に支援していくことが必要である。

【謝 辞】

本調査にご協力くださった学生の皆様に心より感謝致します。

【文 献】

- 1) 中村雄二郎. 術語集一気になることば一. 東京. 岩波新書: 1984. p186-190
- 2) 藤岡完治. 看護教育の方法. 藤岡完治, 堀喜久子編. 看護教育の方法. 東京: 医学書院; 2002. p 4
- 3) 堀喜久子. 授業. 藤岡完治, 堀喜久子編. 看護教育の方法. 東京: 医学書院; 2002. p. 71
- 4) 松木光子監修. 看護学臨地実習ハンドブック—基本的考え方とすすめ方—改訂 3 版. 京都. 金芳堂: 2003. p134
- 5) 深谷計子, 羽山由美子. 看護にいかすクリティカルシンキング. 東京: 医学書院; 2002.
- 6) 江本愛子監訳. アルファロ看護場面のリティカルシンキング. 東京: 医学書院; 1996.
- 7) 深谷計子, 羽山由美子. 同掲書 5) p. v
- 8) 中村雄二郎. 同掲書 1) p. 188
- 9) Lucille E. Notter. Essentials of Nursing. Research. 訳 内海 滉. 東京. 医学書院. 1982.

[Study Report]

Analysis on the Effective In-Advance Preparation for Enhancing the Maternity Nursing Practicum(1st Report)

– Based on questionnaires on fourth-year students
after completing the clinical training –

Taeko Ogata, Kuniko Sakai, Mineko Ezima, Michi Harada

【Abstract】

This study aimed to pursue how the in-advance preparation for the clinical training of the maternity nursing should be offered by understanding the effectiveness and application of the last-minute workshops and the learning task report to get students ready for the clinical fieldwork. A retrospective survey was conducted on 121 fourth-year students of “A” university after the completion of the clinical training. The questionnaire consisted of multiple-choice questions and freestyle descriptions.

The questionnaire outcomes showed that 97% of the students retrospectively evaluated their own attitude in participating the last-minute workshop at the third year as good. The following workshop technical items achieved 87% to 57% “experience rate” at the clinical training: “vital signs assessment, bathing, and physical measurement of the newborns”, “case study of nursing pregnant/puerperal women”, and “measurement of uterine fundus height and abdominal circumference of pregnant women, Leopold’s maneuvers, and monitoring fetal heart rate”. These items coincided with those that the students suggested to continue offering in the future workshops. One of the workshop assignments, “planning and preparing the theme report” saw a divided result. Although approximately 70% of the students started to see the direction of the theme, their opinions in the free description section differed considerably between those who found positive significance in the assignment and utilized it actively in the clinical training and those who did not. Approximately 90% of the students expressed that the in-advance learning task report was “useful/utilized in the clinical training”, although some remarked that “what I learned in advance was not sufficient” and “it would be better if instruction were given to connect each task”.

Analysis of the questionnaire demonstrated students’ desire that the workshop technical items should cover those with higher experience rates in the clinical training. “Planning and preparing the theme report” and “in-advance learning task report” were found to require tailored instructions based on the different level of perception/understanding of each student.

Key words :maternity nursing practicum, in-advance preparation, last-minute workshop before clinical training, workshop technical item, learning task report, planning and preparing the theme report